



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シモーヌ・ヴェイユにおける無化の神秘 : 「脱創造」と神への回帰を巡って
Author(s)	澤田, 愛子; Sawada, A
Citation	基督教学, 25, 1-17
Issue Date	1990-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46491
Type	journal article
File Information	25_1-17.pdf



シモーヌ・ヴェイユにおける無化の神秘

——「脱創造」と神への回帰を巡って——

澤 田 愛 子

はじめに

シモーヌ・ヴェイユ(Simone Weil 1909-1943) 戦乱を重ねていた二十世紀前半の世界に闇夜に輝いて消えた一条の光のように、あわただしく生涯を終えたひとりの女性。始めから終わりまで不幸への共感に貫かれたその起伏に富んだ生涯は、ただひとつの願望に貫かれていた。それは生涯を通して真理に至りつくことであった。その目的の為にあれば彼女は如何なる労苦や危険も厭わなかった。単に机上で事物を論じる偽善性を嫌悪し、時代の落し子ともいべき多様な不幸に身を委ねることによって、ヴェイユは、人間を真理と光より遮断しているものを自ら確認してゆくとした。人間が己れの有限性を認めることなく、何者かであろうとすること、そこより人間の悲劇のすべてが始まるという。欲望は幻想の中で際限なく自己を拡大し、それはやがて太った動物(gros animal)として弱き者を食い尽くしてゆく。こうして食い尽くされた人々は、虫けらのように踏み潰され忘れ去られてしまうのだ。しかし拡大した自己は、幻想の中にある限り如何なる現実性も持ち合わせず、真理の光もそこへは到達することがない。彼等の権勢

はやがて朝の露のように消え去る運命にあるであろう。その時彼等の死の床は何をもたらすのか。人間にとって真理を觀ることなく、終局に達することほど恐ろしいことはないであろう。

では如何にしたらよいのだろうか。真理に達する為には、まず幻想から脱して、自己が何者でもないことを認識する必要があるとヴェイユは強調する。ここより真理への旅路のすべてが始まるのである。「脱創造」(decréation)⁽¹⁾といふ彼女の形而上学的中核思想は、こうして誕生することになった。「脱創造」はまさに彼女の激しくも真摯な生涯の晩年に辿りついた深淵な境地であり、彼女の全思想と生き方を統合する礎石となったのである。

それでは今より、この「脱創造」の概念を詳細に分析し、吟味してゆくことよって、ヴェイユが辿りついた究極の境地を共に味わってみたいと思う。

一、真理に至る為には何故自己の無化が必要なのか。⁽²⁾

本問いを考察する為には、二側面よりの説明が可能であろう。即ち(一)、創造と神よりの離反、(二)、脱創造と神への回帰である。今よりそのおのおのをみてゆくことにより、ヴェイユの形而上学的中核思想の骨格を示したい。それらはきわめて論理的な構図となるはずである。⁽³⁾

(一)、創造と神よりの離反

シモーヌ・ヴェイユの形而上学的思想の中心は神(Dieu)であり、すべてはそこより始まり、そこへ戻ってゆく。神こそ真理(vérité)にして絶対善(bien absolu) 唯一の實在(réalité)であり、⁽⁴⁾我々の経験世界の外側に位置する絶対的存在である。従ってその神より創造された被造物(creature)は、質的に神より断絶され、実在と真理と善の外側にし

か位置することができない。

それ故神がこうした不完全な存在 (existence) を許し給うたことにより、創造 (création) の業は伝統的な解釈によるところの神の栄光の顕れではなく、かえって栄光の放棄 (abdication) であり、縮小 (diminution) の業でもあったとヴェイユはみなしていた。つまりそれは彼女の独創的な表現によれば、神の自己放棄 (reconnement de soi-même) の結果に他ならなかったのである。

「創造は神の側からみれば、自己拡張の行為ではなく、後退、放棄の行為である。神と全被造世界とは神だけよりも小さいものだ。」

このような思想はもちろん正当なキリスト教のドグマでもないし、それに慣れている思考には異常なものと映るかもしれない。しかし本稿は彼女の思想のキリスト教的な正当性を問うものではない。あくまでもヴェイユの独創的な思想を分析して、彼女の至った至高の境地を展望してみることにするのである。従って彼女の論理を続けてみることにしよう。

では何故神は自らこの威光の放棄を望み給うたのであろうか。それは何人にも測り知れぬ神秘であるが、ひとえに神の愛なる意志のなせるところであったと考えられよう。愛は常に他者の存在を、しかも劣った者の存在を許す性向をもっているのだ。つまり神は愛に基づいて自己放棄をなさったのだと考えてもよいのである。

ところでこのような愛によって創造された有限な被造物も、もう少々詳細にみてゆけば、人間と他の被造物とは、本質的な相違のあることに気がつくであろう。即ち人間は神の特別な賜物をもって創造されており、それ故全被造物の中でも、特別な位置を占めているという。つまり人間は自由な、それ故自律性をもった存在として創造されており、同時にその魂の創造された有限な本性において、神の為にのみ働く一点を、即ち非創造の (incréée) 超本性的部分

(*la part surnaturelle*) を宿しもつ存在として創造されたということである。⁽⁶⁾そしてこの超本性的部分が本性的部分に働きかけることによって、我々はじめて自由を、神意なる必然性 (*nécessité*) に同意するという形式のもとで、神の為に用いつつ、神に回帰することができるようになるのである。これは物質が神の必然性に盲目的に服従しているのとは大きな相違である。

しかしながら人間には悲しい現実がある。それは魂の超本性的部分が、最初はほとんど機能をしない為に、本性的部分が魂全体を被っているという事実である。それはあたかも自己 (*le moi*) そのものときえなっているかのような印象を与えている。この場合の本性とは誠に不完全である故に、人間は自己に与えられた賜物なる自由を誤用 (悪用) して、かえって神より、それ故真理から遠ざかる方向に進んでしまったのである。自由は超本性的部分が働いてはじめて神の為に用いることが可能になる。物質には自由がないから、宇宙の必然性なる神意への完璧なまでの服従が可能であるが、それは盲目性においてであって、自己を放棄した愛なる神は、人間にはご自分の与えた自由を用いての信従を望み給う。けれども超本性的部分の機能しない人間は、その神意に応えることができず、結果として様々な悲惨な事態をこの世にもたらしてしまったのである。「脱創造」の概念に導くのは、この自由意志による神よりの離反という側面からである。

自由の誤用 (悪用) による神よりの離反は、一般的には罪という概念によって表現されている。この原形を原罪 (*péché original*) に求めることができるが、⁽⁷⁾ 罪の起源はいずれも、人間が自らの有限性を認識することなく、自らが神のように存在する (*être*) ものであると錯覚して、結局は神になり代ろうと欲するところより来たのである。⁽⁸⁾ 魂の本性的部分は、本来、自己の拡大しか求めないように造られている。

「我々の罪はみな、存在する (*être*) 者であろうと欲するところより生じてくる。」⁽⁹⁾

神は愛によって、神に似た。能力を許したばかりに、結果的に人間から背を向けられるようになったのである。人間の世界に生じる様々な悪は、この神よりの離反に基づく魂の本性的部分のなす罪を起因としている。神よりの離反は、人間を宇宙の中心に置くというひとつの幻想によって、人間を真理の光から遮断してしまったのである。⁽¹⁰⁾人間界に生じる不幸な出来事もここより来たる。無にすぎないものが存在を有し、しかも善悪までも決定する能力をもつという錯覚が、我々の世界を虚偽と苦痛で被い尽くしてしまった根源でもある。従って悪は幻想であり、⁽¹¹⁾真理なる神との距離を示すものに他ならない。⁽¹²⁾

けれども我々がこの状態に留まり続けるかぎり、それは幻想の世界に閉じ込められているのであるから、真理の光をみることもないであろう。しかしそれでは何の為の人生であろうか。もともと人間は神に回帰する為に創造されているのである。⁽¹³⁾たとえ科学が発達し、世界が繁榮して、物質的な満足を享受したとしても、人生を根底から支えているその根源的真理の光のもとにいないのであれば、人生は空しく、人間は生涯夢しか見ないことになるであろう。従って人生の最重要課題は、こうした幻想に気づいてそれを打ち破り、我々の置かれている現実を裸のまま直視し、神への従って真理への回帰の旅路を辿ることにあるのである。

それではこの回帰は如何にしたら可能となるのであろうか。ヴェイユは自己の体験より結晶させた険しい道程へと我々を導くことであろう。次にその問題を考えてみることにしよう。

(二)、「脱創造」と神への回帰

このようにして「脱創造」(décréation)の思想が生まれてくることになる。それは神への回帰のほとんど唯一の道でもある。

それでは創造を脱することが、どうして神への回帰となり得るのであるか。今よりこの問題を少し詳細にみてゆきたい。

既に(一)においてみたように、魂の本性的部分の自由の悪用即ち罪が、神よりの離反をもたしたのであれば、神への回帰を示す脱創造も自ずとここより明らかにされることであろう。即ち離反の根を宿した本性的部分による魂の支配を、創造されなかつた超本性的部分の支配に移行させるようにすればよいのである。この支配の移行の為に必要とされるのが、本性的部分のひたすら自己否定であり、それは換言すれば、利己的な自由を捨てて、真理にのみ従うことを意味する。そして魂の本性的部分は自己そのものでもあるから、それは又、自己否定、自己放棄、それ故自己の無化とも言い得る内容になるのである。

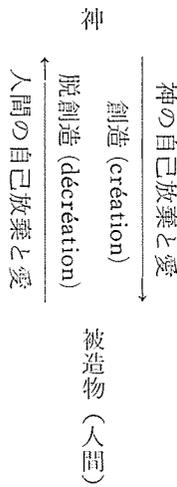
即ち「脱創造」とは、神に立ち帰る為に、神ならざる自己をひたすら放棄し、自己の無化をなすことなのである。自己の内部で神に離反する有限な本性が無化されれば、それと同時に、魂のあの靈的な一点が輝くことになり、人間はその点を通して自らの魂を神に返すことができるようになる。そしてこの靈的な部分の光は、自己放棄や自己の無化の強さに比例して、一層その輝きを増すことになるであろう。こうして人間は罪と幻想の世界より、真理と実在の世界に解放されるものとなるのである。要するに創造されたものを、創造以前の無垢なる純粋な点に戻すことによって人間は真理へと解放されることができるのである。¹⁴⁾

我々の被造性の中には、およそ価値あるものは何も存在しないとヴェイユは考えている。¹⁵⁾ 価値を有しているのはただ創造されなかつた部分のみであり、宝は創造された世界には存在し得ないのである。それは時空の外側に、ただ神の中のみある。そこに至る為に、我々はひたすら自らの被造性を無に帰せしめるより他はない。それは神以外のすべてのものの否定にも通じる。シモーヌ・ヴェイユの形而上学は、ただこの神に導く無化という一点を目ざして収斂

してゆく。真理の支配下に入る為には、そこに真理以外のものがあってはならないのであろう。それは神へのそれ故真理へのひたむきな愛なのである。

最後に、以上(一)と(二)で述べた内容をまとめて図示してみることしよう。それはヴェイユの形而上学のベースペクティブを構成するものとなる。 「脱創造」とは結局、神が創造において示された自己放棄と愛を、今度は我々の側から模倣することにすぎなかったのである。

「我々は自ら脱創造することによって、世界の創造にあずかることができる。」¹⁶



そしてこの循環の中で、神の愛は結局神に戻ってゆく。完全者は自分しか愛することができないからである。我々は結局神の愛がよぎってゆくひとつの場所以外のものではあり得ないといえよう。¹⁷

二、「脱創造」の諸段階

シモーヌ・ヴェイユの形而上学における創造と脱創造の関係の意味が明らかになったところで次には、脱創造は如何なるプロセスを経て完成に至るかという問題に触れなければならない。そこで以下において、そのプロセスが内包する問題に留意しつつ、その諸段階を内容別に整理しながらまとめてみたい。ただしヴェイユ自身は、脱創造のプロセスを段階別に分類して述べているのではない。ここに記述するものは、彼女の多様な著作から筆者が自由に整理し

てまとめた結果にすぎないことを、まず断わっておきたいと思う。

a. 基底にある根本姿勢 —— 「待つこと」と受動性 ——

ヴェイユの神に向かう態度には常に一貫した姿勢が窺える。それは如何なる態度に基づく姿勢なのか。

我々は有限にて不完全な存在の故に、神とは質的に断絶された世界にしか住み得ない。その我々がどうして自らの力で、もうひとつの世界に達することができようか。我々が歩めるのは水平の方向のみであり、垂直に歩を進めることは如何んともし難い不可能事である。⁽¹⁸⁾ もし水平の方向に歩んで、神に達したと思ってみても、そうして達した神は錯覚であり、見出ししたものは神ではないであろう。⁽¹⁹⁾ 我々が神に達し得るのは、ただ恩寵 (*grace*) の力によるのであり、人はその恩寵が十分に働ける受動性を己れのうちに準備しなければならぬのである。

この受動性 (*passivité*)こそ、まさにヴェイユの神的事象に向かう時の基本姿勢を構成するものに他ならない。とはいえそれは、十七世紀の静寂主義 (*quietisme*) に代表される無為性を意味するものではない。むしろヴェイユの場合には、もっと積極的な姿勢に裏づけられた心の眼差しであり、彼女のきわめて重要な表現を用いれば、「待つこと」 (*attente*) に他ならない。まさに「待つこと」こそ霊的生活の基礎であり、⁽²⁰⁾ 受動的在り方の究極でもあるのだ。⁽²¹⁾

人は、扉の傍らに立ってじつと動かず目ざめており、扉を叩く音がするやすぐに開けて応答する下僕のように神を待たねばならない。⁽²²⁾ この場合の不動性 (*immobilité*) とは、外的な行動の不在を意味するものではなく、神によって命じられる人間の義務の遂行を意味するものとなり、⁽²³⁾ それと同時に、周囲の人々を加えるあらゆる嘲笑や攻撃にも屈せず、ひたすら待つ態度や姿勢の一途さをも示しているといわれている。これはまさにギリシャ語の *bravouros* の意味する内容と一致する。⁽²⁴⁾

従って「待つこと」をもって示されるヴェイユの受動性とは、主人の呼びかけにいつでも応えられるようにと、覚醒して神経を集中させていた下僕のように、積極的な受け身なのであり、その積極的な受け身が、願望を礎石とし、⁽²⁵⁾ 注意力を媒介として、ついには神を降臨せしめる力となってゆくのである。これが脱創造の第一段階を形成するものになってゆく。

それでは今より脱創造の完成に至るまでの諸経過を順を追ってみてゆきたい。

b.、第一段階——神の臨在への準備——願望と注意力——

まず最初に魂は、その超本性的部分に恩寵の光を受けて、真理を願望し始めることにより、このプロセスは始まるものと考えられる。⁽²⁶⁾ 魂は恩寵の光のもとで自己の有限性を認識し始めるや、真理を自己の外側に願望するようになる。この段階の魂は神を直接的に願望するわけではないが、真理への願望において、後にそれが結果として神をもたらしことになるのである。ともかくこの願望において、魂は自己の外側に目を向け始めるようになり、これが回帰への第一歩を印すものとなるのである。

次にこの魂は、その願望をできる限り持続させ、意志力(volonté)ではなく、注意力(attention)によつて、願望の対象の顯れをひたすら待ち望む(attendre)ようにしなければならぬ。覚醒しつつひたすら主人を待ちわびる下僕は再びここで模範となる。こうしてはじめて自己の無化への努力が要請されることになる。

ではこの注意力とは如何なるものなのか。ヴェイユはこの語に特別な意味を付している。即ちそれは願望する主体が、思考をひとまず停止させ、待機状態(en attente)にあつて、対象を待ち望み、その赤裸な顯れの時に受容するという意味をもつのである。つまり自己を空しくして、願望する対象の上に凝視(regard)の眼を注ぎつつ待つことによ

つて、対象の眞実な姿をありのままに受け入れようとすることなのである。このようにして対象はその眞実において把握される⁽²⁸⁾。

ところでこの注意力はまず学習の場で育成されねばならぬとヴェイユは考えていた。教育の目的はほぼこの一点にあるのである。教科を学習する場合、問題を解くことを通して充分にこの注意力を養うことができる。そしてそれがしだいに祈りに近い効用を発揮し、後になって思いがけなくも神をもたらすことがあるのである⁽²⁹⁾。例えば幾何学の問題を解く時、自己流の思考(こだわり)を捨てれば、はじめて難題の解答(眞実の頭れ)がみえてくることがある。自己流の思考を捨て去ることは、自己の無化に役立つものであり、こうして魂は無化への道程を歩み始めることになる。これは又、脱創造の始まりでもある。

そしてこの注意力とそれの連続体なる待望のひたむきな受動的訓練が、学習の場においてのみならず、生活のあらゆる側面に及ぶことによつて、一層無化が促進され、増し加わつた恩寵の光のもとに、ついには魂の超本性的部分に神の臨在をもたらすことになるのである。学習の場を中心に養われる注意力を「知的注意」(attention intellectuelle)と呼ぶのに対して、神を降り来たらせる注意力を「直観的注意」(attention intuitive)とヴェイユは呼ぶ⁽³¹⁾こともある。即ち無化の道を通り進みゆくことにより、知的注意がいつしか直観的注意となり、それが神の臨在を待望の中でもたらすことになるというのである。従つて注意はまさに祈りにも等しいのである。こうして神の臨在を真理や善への渴望を通して受けた魂は、この上もなき欲びと慰めで満たされることであろう。こうして脱創造の第一段階は達成されることになる。しかしここにおいてなされる脱創造はまだ不十分なものであり、魂の本性的部分は、その支配を完全に超本性的部分に移し得たとは言えない。神とのより親密な出会いに導かれる為には、魂は打ちのめされなければならぬのである。

c. 第二段階——神の臨在から不在へ、そして暗き夜

けれども魂に降り来たった神は、その生活上の大きな試練を通して、やがてその御姿を魂から隠されるであらう。これによって魂は遺棄の苦悩の中に捨て置かれるのである。⁽³²⁾

大きな試練の極致は、ヴェイユが「不幸」(le malheur)と名付けている特別な苦悩である。それは単なる苦しみではなく、凄惨な事態、つまり心理的、肉体的、社会的な根こぎ(déracinement)による魂の粉碎なのである。⁽³³⁾

不幸は誰にでも起こり得る災難ではあるが、魂の靈的な部分、即ち超本性的部分が照らしを受けていない時に、これに襲われると、真に魂は破壊されてしまうという。これこそこの世の地獄であって、だからこそ不幸はできる限り避けねばならぬとヴェイユは語る。けれども超本性的部分が照らしを受け、いったん神の臨在を受けた魂にとつては、不幸はかえって自己放棄を外的に助け、脱創造の強化の役目を荷なう恵みの試練となるのである。幸福な時、人は容易に自己を放棄し得ない。第一段階における注意力の育成さえ、自己を砕く力にまでは成り得ない。そこで神への完全な回帰に向けて特に選ばれた魂は不幸という冷酷なメカニズムの介入によって、自己が徹底的に打ち砕かれる体験をする必要があるのである。

不幸は魂を粉碎するものではあるが、強められた魂の靈的部分までも破壊するものではない。それどころか恩寵の光のもとに、本性の嫌悪する不幸に同意させなして、悲痛なまでに神意への服従を示すのである。この時義人の魂は、肉の嫌悪と靈の同意の中にあつて、激しい二分裂を体験するという。これはすさまじき苦痛であり、それ故自己の罪を償うもの (la souffrance expiatoire) となつてくれる。⁽³⁴⁾

この苦しみの夜こそまさに「暗き夜」(la nuit obscure)に他ならぬ。⁽³⁵⁾そこには如何なる意味も、如何なる愛も、

如何なる慰めも見い出されることはないのだ。魂は何かぞつとするような恐ろしさの中に浸っているという。そんな時不幸な人は、ただ次のように叫ぶことしかできぬであろう。「何故私は災いを受けるのか。」⁽³⁶⁾けれどもこの叫びに、沈黙のみが返ってくる。人はこの時「真空」(le vide)に触れるのである。⁽³⁷⁾

しかしながら真理の光が奔流のように流れ込んでくるのはこの穴を通してなのだ。人はその時まで、安易な慰めや空想によってそれを埋めてしまわぬように用心をしなければならぬ。そして不幸のもたらす苛酷さを裸のままに受け止め、意味のわからぬままに、じつと不在の神を待ち望まねばならぬのだ。それは不在の神を愛し続けることであり、真理の方角より注意の眼差しを逸らさぬことでもある。例の下僕の例えはここでも又よき模範となるう。

こうして暗闇の中でひたすら愛し続けた魂は、やがて真空を通して、いや増す真理の光のもとに、以前よりもさらに親密にして確かな神の臨在をその魂に受けるのである。この時魂は深き喜びと慰めの中に、自己への執着から完全に解き放たれ、真の自由を楽しむことができるようになる。肉と霊の、あるいは本性と超本性の戦いにおいて、霊は今や完全に勝利を収めたのだ。

ここにおいて脱創造は、不幸を通して、ほぼその目的を達成し得たといってもよいであろう。それは霊的な意味での自己の死でもあり (la mort morale) 稀有な魂のみが達し得る境地でもある。霊的死において、自己は完全に我欲に死に、無 (néant) となるのであるから。

d. 第三段階——完成としての死

そしてこのような段階に至った魂にとって、やがて訪れる自らの肉体の死は、脱創造の完成を意味するものとなるう。既に霊的に自己に死んだ者にとって、自らの死はもはや恐怖の対象ではない。それどころか神への完全な回帰とし

て、どれほど深き慰めとなり得ようか。死の瞬間こそ、まさに「極小時間 (une fraction infinitésimale du temps)」と入れ替わりに、純粹な、裸の確かな永遠の真理が魂に入る瞬間⁽³⁸⁾であれば、魂はこの瞬間に真理を受けるにふさわしくあるように、与えられた人生の全時間を費して己れを準備するのである。覚醒した魂にとって、人生とは自己の無化を求める道程であり、真理をもたらず自己の無化とは、まさに死の瞬間において完成するのである。その時魂は、創造以前の純粹な点に立ち戻ることによって、永遠に神と結ばれることになるであろう。その日より神はもう魂より御姿を隠し給うことはできないのである。真理はまさに死の側にある (La vérité est du côté de la mort)⁽³⁹⁾のである。

おわりに

以上シモーヌ・ヴェイユのきわめて神秘的色彩を濃くした形而上学的中心思想を、真理(神)に導く自己の無化という視点より概観し整理してみた。「脱創造」は、まさにシモーヌ・ヴェイユの生涯をもって準備され、そして三十四歳のその死をもって完成されたといってもよいであろう。それはなんと痛ましくも美しき死であったことが。

「脱創造」は希望の思想である。それは空無の一点を志向することによって、人間の悪を神への道に変化せしめるからである。その中では恐ろしき不幸も、神を待つ夜となってくれる。魂を愛する者に結びつける夜となってくれる⁽⁴⁰⁾。光は暗夜においてははじめて輝くものであるからである。人間が己が悪に気づく時、はじめてこの闇は彼を取り囲むことになるであろう。しかしその時既に、闇のむこうには光が押し寄せているのである。

物質的繁栄の中の精神的貧困、暴力と人間性の疎外、人間の我欲が留まることなく脹らみ続けるこの時代に、今一度ヴェイユのメッセージの重さを心にしかと受け留めてみたいと思う。

(註) シモーヌ・ヴェイユの同名の著作に関しては、二回目の引用より書名のみを記すことにする。)

(1) *décréation*「これはヴェイユの造語であり、本稿では一貫して脱創造と訳した。

真理と己れ自身の無化との関係は、神秘思想一般にみられる共通テーマである。ヴェイユは特に晩年、東西の神秘思想に惹かれて、多様な読書をしている。本論で展開している「脱創造」がそれらの影響を受けていないと断言したら間違ふことになろう。とりわけ彼女が熱愛していた十字架の聖ヨハネ (San Juan de la Cruz) やエマックホルツ (Meister Eckhart) の思想の影響は随所にみられるのである。けれども本稿の目的は彼等との比較研究にあるのではない。稿を改めて後日、それらをまとめてみたいと考えている。

(3) 神的事項を、ないしは非論理なるものを、数学的公式にも似た論理性をもって表現するのが、ヴェイユの特徴ではあった。彼女は自分の悟った真理の真実性を確信するあまりに、それを誤りなく伝達することの必要性から、そうした方法を採用しているであろうと思われる。

(4) Simone Weil: *La connaissance surnaturelle*, p. 38, 229, 109, etc. Gallimard, Paris, 1950 etc.

(5) Simone Weil: *Attente de Dieu*, p. 131, Favard, Paris, 1966.

(6) Simone Weil: *La connaissance surnaturelle*, p. 35, 39, 40, 248, etc. Simone Weil: *Écrits de Londres et dernières lettres*, (アン・ドン論集と最後の手紙 (田辺・杉山訳) pp. 16-17, 勁草書房、東京、1969) 他多数。

シモーヌ・ヴェイユは人間の魂を、本性的部分と超本性的部分の二部分に分けて論じている。もう一度ここで整理をしてみたい。即ち、

a. 本性的部分——創造された部分であり、自己そのものとも言い得る部分。神より分離し、自己の利益のみを謀り、人格的 (personnelle) とも呼ばれている。

b. 超本性的部分——創造されなかった部分であり、魂の一点にある。恩寵を通して神の為のみ働く。そして恩寵の増大と共に強化されてゆく。非人格的 (impersonnelle) とも呼ばれている。我々の中にあつて、もっぱら愛されるに値するのは、この部分である。

こうした魂の捉え方は、ヴェイユの形而上学の礎石をなす。従つてこの礎石が崩れると、彼女の思想体系も崩壊しかねないという性質をもった鍵概念となつているのである。

- (7) La connaissance surnaturelle, p. 168 etc.
- (8) ヴェイユの用語の使い分けによれば、*être* は神に關してのみ用いられ、人間の「存在」には *existence* という語が用いられている。即ち人間は、*être* の見地からすれば無なのである。神こそ存在の充満であり、我々の存在は見かけ上の (*apparente*) のでしかない。「神はわたしを存在 (*existence*) の外観をもつ非存在 (*non-être*) として創造された。」 (*La connaissance surnaturelle*, p. 42).
- (9) La connaissance surnaturelle, p. 175.
- (10) *Ibid.*, p. 176 etc.
- (11) *Ibid.*, p. 176.
- (12) Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu, pp. 36-39. 及び Simone Weil: Cahiers II, p. 251, Plon, Paris, 1972 etc.
- (13) Simone Weil: La pesanteur et la grâce, p. 41 etc., union générale-d'édition, Paris, 1948. etc.
- (14) La pesanteur et la grâce, pp. 40-41; Cahiers II, p. 105; La connaissance surnaturelle, pp. 90-91, pp. 205-206; Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu, pp. 36-37. 及び Simone Weil: Cahiers III, p. 251, Plon, Paris, 1974.
- (15) ヴェイユ以外の著作では、Milkos Veto: La métaphysique religieuse de Simone Weil, p. 40, Librairie Philosophique, J. Vrin, Paris, 1971 etc.
- (16) こうした思想に触れる時、我々は一瞬戸惑いを覚える。ヴェイユとは何と冷酷な思想家なのかと。ヴェイユが被造性の中に価値を見い出さないのは、あくまでも神の絶対性と比較をしているからであり、神の絶対的価値に魅せられるあまりに、そうした断定を下さざるを得なかったにちがいない。彼女こそ「絶対」の証人でもあったのだ。
- (17) しかし一方では、こうした思想の根底には、これ又熱愛していたプラトン思想の影響も拭い切れないであろう。それについても稿を改めてまとめてみたい。
- (18) Cahiers II, p. 216.
- (19) Simone Weil: Intuitions Pré-chrétiennes (前キリスト教的直観 《シモーヌ・ヴェイユ著作集II——中田・橋本訳》 p. 403, 春秋社、東京、1968.
- (20) Attente de Dieu, p. 191; Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu, p. 44 etc.
- こうした箇所も、記述におけるヴェイユの論理性をよく示している。

- (19) Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu, p. 44 etc.
- (20) La connaissance surnaturelle, p. 44.
- (21) Ibid., p. 57
- (22) Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu, pp. 144-145.
- (23) Ibid., pp. 140-143.
- (24) Ibid., p. 145.
- (25) ここでいう積極的な受け身とは、すべてを神の力に頼っている者が、その頼る姿勢の強さにおいて、神の恩寵の働きに敏感になることであって、その強さは神より出たという意味において、積極的な受け身といったのである。
- もしここで受動性と能動性ということばを用いるのであれば、人間における能動的な働きは、「待つ」姿勢においては、恩寵に導かれた能動性という意味において、受動的な能動性なのである。
- (26) 神への回帰のプロセスにおいて、すべては恩寵が先にある。人間がそれを望んだから恩寵が下るのではなく、恩寵が下ったから望み始めるのである。そして恩寵を与えられる魂の選定は、神の自由意志に委ねられている。
- (27) ヴェイユによれば、意志力とは筋肉の働き以外の何ものでもなく、人はそれによって、決して自分の外へ出ることはできないであろう。意志力とは能動性の極致であり、それを働かせるほど人は疲労して、真理に至ることはできないのである。一方注意力による働きには人を疲れさせるものは何もない。(Attente de Dieu, pp. 189-190 etc.)
- (28) Attente de Dieu, pp. 92-93
- (29) Simone Weil: La condition ouvrière, p. 203, Gallimard, Paris, 1951⁷ 又は Attente de Dieu pp. 85-88.
- (30) 注意力の訓練は、時に不幸な隣人にも目を向けさせる力となり得る。しかしこれは奇跡のような出来事でもある。何故なら、生きた肉体が死を厭うのと同じように、思考は不幸について思い巡らすことを厭うものであるからである。(Écrits de Londres et dernières lettres, p. 74) 従ってここでは、すでに超自然的な力が働いているのだといえよう。注意力の訓練によって、人間の眼差しが透明化され、ふじうではみえぬものまでみさせているのであろうか。それはすでに魂の靈的部分に宿り給うた神による眼差しでもあるのである。
- 「愛は目に見えぬものを見るのである。……隣人愛は神から人間の方へと下ってゆく愛である。……不幸な者が彼等自身の為にあわれめるときには、どこにでも神は臨在し給う。」(Attente de Dieu, pp. 136-137)
- (31) La condition ouvrière, p. 203.

- (32) Attente de Dieu, pp. 201-211; Cahiers III, p. 45 etc.
- (33) Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu, p. 122; Attente de Dieu, p. 100 etc.
- (34) La pesanteur et la grâce, pp. 36-37 etc.
- 非常に稀ながら、この苦痛の他にヴェイユは賤い役割を果たす苦痛 (La souffrance rédemptrice) もあると述べているが、それは不幸との遭遇以前に、自己放棄を完全にした魂だけが体験する苦痛である。そこにはもはや破壊される自己はないが、不幸は完徳の域においても、自己の破壊に匹敵する苦悩をもたらすのである。キリストの受難がその最良の例である。(La pesanteur et la grâce, p. 36) こうした魂からは、キリストのかの叫びが聞こえてくる。即ち、
- 「我が神、我が神、何故、我を見捨てられ給うたのか」(Mon Dieu, mon Dieu, pourquoi m'as-tu abandonné?) (La pesanteur et la grâce, p. 92, ペナイユの46) 云。
- (35) ヴェイユのこの語は、明らかに十字架の聖ヨハネの「暗夜」(la noche oscura) の思想の影響を受けている。ヴェイユのいう選ばれた人々が不幸によつて試される「暗夜」(la nuit obscure) とは、十字架の聖ヨハネが記述するところの、神との至高の一致を目前に控えた靈魂に訪れる最終的な浄化手段としての、「精神(霊)の受動的夜」(Noche pasiva del espíritu) にきわめて近い内容を有しているのである。
- (36) Ecrits de Londres et dernières lettres, p. 39.
- (37) Intuitions Pré-chrétiennes, pp. 404-405.
- (38) Attente de Dieu, p. 37.
- (39) La pesanteur et la grâce, p. 21.
- (40) San Juan de la Cruz: Noche Oscura (Obras Completas), p. 318, La Editorial Católica, Madrid, 1974.